

## 易往を求めた珍海、易行を極めた法然

成瀬  
隆順

### 一 はじめに

一心専念<sup>三</sup>弥陀名号、行住坐臥不<sup>レ</sup>問<sup>二</sup>時節久近<sup>一</sup>、念念不<sup>レ</sup>捨者、是名<sup>三</sup>正定之業<sup>一</sup>。順<sup>三</sup>彼仏願<sup>一</sup>故。<sup>〔一〕</sup>

これは善導集記『観経疏』巻四「散善義」深心釈中の、いわゆる就行立信釈に示される五種正行中第四の称名を「正定之業」とする有名な文言であり、浄土宗の「開宗の文」として尊重されていることは言うまでもない。この一節の引用により注目される『決定往生集』は、平安時代後期に東大寺や醍醐寺で活躍した珍海（一〇九二—一説に一〇九二—一五二二）によって選述された浄土往生に関する著作である。

珍海は、三論宗を本宗とする学僧として「日本三論学中興の祖師」（小野 一九三三、〇〇一頁）とも評され、三論教学を中心に数々の著作を残した碩学として知られる。また、三会の講師を歴任しているため、その学階により「珍海已講」と呼称され、あるいは住房の名称より「禅那院」とも号されている。美術史に詳しい人であれば彼の

名を聞いて思い起こされるのは、ボストン美術館に所蔵される「法華堂根本曼荼羅」であろう。その裏面の修復銘により久安四年（一一四八）、東大寺別当でもあった勸修寺の寛信が、珍海に修補せしめたことが知られている。画僧としても秀でていたことは、その父が土佐派の始祖ともされる絵師で従五位上内匠頭であった藤原基光であり、『尊卑分脈』の上でも珍海の名前の傍らに「絵師」と附記されていることから史実と考えられる。浄土思想に関する先行研究では先の「開宗の文」中の「順彼仏願故」の願を、永観や法然是第十八願としたのに対し珍海は第二十願と捉え、称名念仏を「正中の正」と評価しつつも余行を捨て切れない所、すなわち諸行併修に法然との差異を見ることができると指摘されている（普賢 一九七二、二三六、二四〇頁等）。数ある珍海の著作の中でも『決定往生集』は、法然以前の浄土教修学の趨勢を探る上で有益なものであり、本稿ではその『決定往生集』に見られる「開宗の文」に関する問題点を中心に、凡夫の易往を追求した珍海の浄土思想の一端に触れてみたい。

## 二 珍海の伝歴について

明治時代に法隆寺の再建論争において非再建説を唱えた美術史家で、珍海研究の先駆者のひとりでもある平子鐸嶺氏が「海已講の事歴は、古来頗る明晰を缺けり。関氏の「釈書」にこれを載せず、蛮公に到りて漸く録せり。」（平子 一九一四、四七六頁）と述べるように、元禄十五年（一七〇二）に編纂された師蛮の『本朝高僧伝』以前には、まとまった珍海の伝記は残されていない。浄土宗に関係する所では、円智・義山の手による『円光大師行状画図翼賛』（以下『翼賛』）にも、珍海の伝歴を見ることができるといえる。この書は『法然上人行状画図』、すなわち『四十八卷

伝』の註釈として代表的なものであり、『本朝高僧伝』に遅れること一年、元禄十六年（一七〇三）の成立とされる。『四十八卷伝』巻一七には、上品往生を願った蓮生（熊谷次郎直実）が、自筆の夢の記にその望みを遂げる夢を見たとの描写がある。そこでは、夢告により著作を記した人師として、珍海の名前が善導・源信とともに挙げられている。その場面を註釈する『翼賛』巻五八「僧尼之余 伝本第二十七」では、「大系図」すなわち『尊卑分脈』によって、藤原魚名より十一代の後に絵師基光の子として「東大寺已講珍海」の名前が確認できると記されている。この指摘は『翼賛』が初出であろう。また、三論宗としては東大寺東南院覺樹の弟子であり、別書では醍醐寺に住し三寶院定海を師としていたとある。珍海が東大寺と醍醐寺の両寺に住していたことは、東大寺東南院ならびに醍醐寺を建立した聖宝の時代より両寺が顕密兼学であったため何ら不思議ではない（永村 二〇〇三、〇二九頁）。また、定海は覺樹の実兄であり、珍海は覺樹の死後時を隔てず定海に従って醍醐寺に移ったことが指摘されている（平子 一九一四、四九九頁）。

続いて、定海の命による曼陀羅図画を辞退した折、夢中で山神により蹴倒された際の傷がもとで死に至った旨が記されている。実はこの逸話は、醍醐寺座主であった成賢（一一六二～一二三一年）口授の『遍口鈔』に記される「仁王經法事」に遡ることができる。ここでは、鎮護国家のための最大秘法であった仁王經法に用いられた「秘曼荼羅」の紙形を勸修寺流祖である寛信に見せてしまったため、醍醐寺の鎮守神、清瀧権現の治罰によって珍海が死に至ったとの口決が残されている。この珍海の死に関する夢中の逸話は、醍醐寺山内における三寶院流の正統性を示すために形成され、『遍口鈔』以外にも『報物集』、『幸心鈔』、『秘鈔問答』に口授されたと推察される（拙稿 二〇二二）。勿論、三論宗自体が衰退してしまっただけが主な要因であると思われるが、このような境遇も加わり、近世に至るまで珍海の伝歴は詳しく伝承されなかつたのであろう。

『翼賛』成立後三〇年余りで、宝洲によって珍海撰『菩提心集』の註釈書である『菩提心集夾註』（享保二〇年（二七三五）成立）が著された。上巻の冒頭に見られる「集主海公事歴考」は、当時としては比較的詳しい珍海の伝歴となる。その序文において宝洲は『菩提心集』の大意を「明<sub>二</sub>人身仏教之難<sub>一</sub>遭、別示<sub>二</sub>弥陀浄国之易往<sub>一</sub>、使<sub>二</sub>人人悉発<sub>二</sub>菩提之心<sub>一</sub>。」と述べている。弥陀浄国への易往を示しているとの指摘は、『決定往生集』において易往を追求する珍海の姿勢を想起させよう。

### 三 著作について

次に学僧としての成果を見てゆきたい。「天下第一の絵師」として評価されていた珍海は、同時に碩学と讃えられるように、三論学を中心に多くの著作を残している。現存する著作を列挙すると、『因明大疏四種相違抄』二巻、『八識義章研習抄』三巻、『菩提心集』二巻、『俱舍論明眼抄』六巻、『大乘正観略私記』一巻、『三論玄疏文義要』十巻、『決定往生集』一巻もしくは二巻、『一乗義私記』一巻、『安養知足相对抄』一巻、『大乘玄問答』十二巻、『三論名教抄』十五巻の十一書となる。残念ながら、このほかに逸書として浄影寺慧遠の『大乘義章』『浄土義』の註釈である『浄土義私記』、同じく『賢聖義』の註釈と思われる『賢聖義短冊』、その他に『法華経問答』、『悉檀抄』の存在が諸目録より伝わっている。

これらの著作中、三論学に関するものは『大乘正観略私記』、『三論玄疏文義要』、『一乗義私記』、『大乘玄問答』、『三論名教抄』と数も多く、『大乘義章』に関連するものは『八識義章研習抄』と、散逸している『浄土義私

記』、『賢聖義短冊』である。現存する浄土教関連の著述は『菩提心集』、『決定往生集』、『安養知足相对抄』の三作であり、なかでも『決定往生集』は冒頭の「開宗の文」が引用されたことにより、浄土教研究の上では殊に注目されてきた。法然も東大寺における『無量寿経』の講説を記録した『大経釈』の中で、善導を補助する七師として源信・永観に次いで珍海を挙げつつ、以下のように『決定往生集』にも言及している。

依ニ感師智栄等一、補ニ助善導之義一者、此有ニ七家一。一感師。二智栄。三信仲。四覚親。五源信。六永観。七珍海。  
 …（中略）…七珍海者、作ニ決定往生集一、建ニ立十門一明ニ往生法一。其中亦依ニ善導二修之文一、此傍雖レ述ニ諸行一、  
 正用ニ念佛往生一也。爰知、於ニ往生行業論一專雜ニ三行一、棄ニ捨雜行一專修ニ正行一、天竺・震旦・日域其伝来尚矣。<sup>(2)</sup>

法然が指摘する「善導二修之文」とは、文脈から判断すれば、善導集記『往生礼讃』（以下『礼讃』）に説かれる専修ならば「百即百生」であると専雑二修の得失を論じる一連の記述であると思われる。この善導を補助する「七家」を述べる『大経釈』該当箇所の前段では、その『礼讃』を長く引用した後、以下のようにこれらの文章が行者にとって至要であると述べ、さらに『往生要集』の問答を引いてその重要性を強調している。

私云、夫斯文者、実ニ是行者之至要也一。專雜之訓、得失之誠、甚ニ以苦口一。求ニ極楽之人蓋貯心腑一哉。若夫抛レ雜修レ專者百即百生。如ニ棄レ迂向直一。何レ不到也。捨レ專修レ雜者、千中無レ一。如ニ捨レ夷赴嶮一。遂莫レ達矣。  
 往生要集下云、問。若凡下輩亦得ニ往生一、云何近代於ニ彼国土一求者千万得無ニ一二一。答。綽和尚云、信心不レ淳、若存若亡故。信心不レ一、不ニ決定一故。信心不ニ相續一、余念間故。此三不ニ相応一故不レ能ニ往生一。若具ニ三心一者

不<sub>レ</sub>往生者、無<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>是処<sub>一</sub>。導和尚云、若具能如<sub>レ</sub>上、念念相統畢、命為<sub>レ</sub>期者、十即十生、百即百生。若欲<sub>三</sub>捨<sub>レ</sub>專修<sub>二</sub>雜業<sub>一</sub>者、百時希得<sub>二</sub>一一、千時希得<sub>三</sub>三五<sub>一</sub>。已上 此問答意明以<sub>二</sub>善導和尚<sub>一</sub>二修<sub>レ</sub>決<sub>二</sub>往生極樂之行<sub>一</sub>也。<sup>(3)</sup>

この『礼讚』を引用する『往生要集』の問答は、井上光貞氏が珍海の浄土教思想の意義を法然と比して「ほとんど寸分違わぬほどのものがあるのではないか」（井上 一九五六、四二二頁）と評したことも関連してくる。井上氏が法然回心の出発点と挙げる源信の問いに続く『礼讚』の「百即百生」の文言をもって、法然は『選択集』第二章で「私云、見<sub>二</sub>此文<sub>一</sub>、弥須<sub>二</sub>捨<sub>レ</sub>雜修<sub>三</sub>專<sub>一</sub>。豈捨<sub>二</sub>百即百生專修正行<sub>一</sub>、而堅執<sub>二</sub>千中無<sub>一</sub>雜修雜行<sub>レ</sub>乎。行者能思<sub>二</sub>量<sub>一</sub>之。」<sup>(4)</sup>と述べ、雜修を捨て專修に努めることを勧める。凡夫往生の追及という動機の上では、確かに両者に違いはないけれども、その究明に向けた発想には大きな隔たりが認められる。というのも、珍海はこの『礼讚』を依用する懷感撰『群疑論』「專雜<sub>二</sub>一修章<sub>一</sub>」を用いつつも、異なる見地で下輩人の雜修による安養化土への順次往生を追求するのである。

#### 四 雜修による安養化土往生

珍海は『決定往生集』の序論で西方浄土への決定往生を、教文・道理・信心の三事によるものと定義し、なかでも信心による決定往生を、果決定・因決定・縁決定の三種に展開し論じている。初の果決定は果報としての浄土のことであり、凡夫の順次生、すなわち来世での極楽往生が説かれる。次の因決定は往生の因を指し示し、定善・散

善ともに浄土の業因として認めている。最後の縁決定は弥陀の増上縁、言いかえれば仏願力による往生のことであり、これら果・因・縁の三決定を、さらに十門の決定に分科し詳論している。十門とは、①依報決定、②正果決定、③昇道決定、④種子決定、⑤修因決定、⑥除障決定、⑦事縁決定、⑧弘誓決定、⑨撰取決定、⑩円満決定である。第一の依報、第二の正果、第三の昇道決定は果決定、第四の種子、第五の修因、第六の除障決定は因決定、第七の事縁、第八の弘誓、第九の撰取決定は縁決定にそれぞれ配当され、最後の第十円満決定を総括として、これら全ての義の和合による決定往生の論証が本書の意図する所である。なかでも、序論において果・因・縁の三決定を示す直前に説かれる次の「信心決定義」の記述が、本書の主旨であると推察される。

其信心者、若於<sub>レ</sub>如上<sub>レ</sub>上文理之中、心生<sub>三</sub>信受<sub>二</sub>即名<sub>三</sub>決定。以<sub>三</sub>決定者為<sub>三</sub>信相<sub>一</sub>故。故觀經云、必生<sub>三</sub>淨国<sub>一</sub>。心得<sub>レ</sub>無疑。已上 無疑即信。決定称也。又由<sub>レ</sub>信故必得<sub>三</sub>往生<sub>二</sub>。故經說言、若能深信無<sub>三</sub>孤疑<sub>一</sub>者、必得<sub>レ</sub>往<sub>三</sub>生阿弥<sub>二</sub>陀<sub>一</sub>仏国<sub>一</sub>。鼓音声經 由<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>応<sub>レ</sub>知、下輩之人雖<sub>レ</sub>未<sub>二</sub>一向專精信受<sub>一</sub>、而由<sub>三</sub>暫信<sub>一</sub>亦得<sub>三</sub>往生<sub>二</sub>。此乃信心決定義也。<sup>5)</sup>

ここで示される「暫信」とは「第二正果決定」で論じられるように、『無量寿経』の異訳である『平等覚経』所説の中・下輩人の「暫信暫不信」による極楽の辺地往生の経説を指し示す。珍海は、この辺地と『無量寿経』所説の五智への疑惑不信により受ける胎生を同所と見なしている。さらに、この極楽の辺地胎生と『菩薩処胎経』所説の憍慢界往生を会釈し、本来『菩薩処胎経』中では極楽への道中とされる憍慢界を、辺地とはいえ極楽内である辺地胎生と同所と見做すことにより、雑修による極楽内への順次往生を導き出すのである。「信心決定義」で示される「一向專精」は、行としては專修に繋がると考えられる。下輩人は一向專精に信受することができず、「第二正

果決定」問答中の設問の言葉ではあるけれども、珍海としては「凡夫の行者は專修得難し」の立場に立つのである。そのため、まったく逆の雜修による往生を目指すことこそが、凡夫往生への解決方法であった。そのことが端的に現れているのが『安養知足相对抄』の次の記述である。

若依群疑後解、雜修之者多不<sub>レ</sub>生<sub>二</sub>報土<sub>一</sub>。如胎經說、此以明。雖雜修之者、<sub>□</sub>多生<sub>二</sub>化土<sub>一</sub>。觀經等意、此而說。若准此<sub>二</sub>此積<sub>一</sub>、雜修之者生<sub>二</sub>懈慢国<sub>一</sub>者、即以安養化土<sub>二</sub>為<sub>二</sub>懈慢<sub>一</sub>耳。平等覺經中、下輩<sub>二</sub>辺地胎生<sub>一</sub>對<sub>二</sub>懈慢<sub>一</sub>說事<sub>二</sub>云<sub>一</sub>相当。故知、二<sub>二</sub>經言辭雖<sub>二</sub>少異<sub>一</sub>而定義不<sub>レ</sub>殊也。<sup>6)</sup>

ここでは『群疑論』「專雜二修章」に展開される問答の要点を纏めた引用の中、「又報浄土生者極少、化浄土中生者不<sub>レ</sub>少。」と説かれる懷感の「後解」に対し、珍海は雜修であっても化土には多くが往生できると述べ、懈慢界を安養化土と判じていることが窺える。つまり、懈慢界と辺地胎生を会釈した安養化土を、凡夫易往の土としてとじて確立しようと試みたのである。次に取り上げる「第二正果決定」中の善導集記『觀經疏』卷三「定善義」引用に對する珍海独自の解釈は、雜修と疑心による易往の土を追求する姿勢を傍証している。

又導和尚觀經疏云、第三卷<sub>二</sub>釈地想觀<sub>一</sub>中、心得無疑<sub>二</sub>之文也。①修因正念不得雜疑。雖得<sub>二</sub>往生<sub>一</sub>含<sub>レ</sub>花未<sub>レ</sub>出。或生<sub>二</sub>邊界<sub>一</sub>、或墮<sub>二</sub>胎宮<sub>一</sub>。或因<sub>二</sub>大悲菩薩入<sub>二</sub>開花<sub>一</sub>三昧<sub>二</sub>疑障即除<sub>一</sub>、宮花開<sub>二</sub>發身相顯然<sub>一</sub>。法侶携<sub>二</sub>將遊<sub>一</sub>仏会也。云。②今見<sub>二</sub>此文<sub>一</sub>、胎宮・懈慢因果<sub>二</sub>双挙<sub>一</sub>。謂<sub>二</sub>雜修<sub>一</sub>者名為<sub>二</sub>懈慢<sub>一</sub>。禮讚云、雜修不至<sub>二</sub>心中無<sub>一</sub>也。疑者即胎生因。故知、今言<sub>二</sub>雜・疑<sub>一</sub>者并<sub>二</sub>挙<sub>一</sub>說。雖是<sub>二</sub>一說<sub>一</sub>潛合<sub>二</sub>為<sub>一</sub>。含<sub>レ</sub>花未<sub>レ</sub>出者、総<sub>二</sub>挙<sub>一</sub>過失。或生<sub>二</sub>邊界<sub>一</sub>者、即懈慢也。或墮<sub>二</sub>胎宮



胎<sub>一</sub>是疑心人。此亦双<sub>二</sub>拳<sub>一</sub>二説<sub>一</sub>、而義混<sub>一</sub>。言<sub>レ</sub>雖<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>往生<sub>一</sub>者、即顯<sub>二</sub>懈慢<sub>一</sub>既生<sub>三</sub>極樂<sub>一</sub>。若爾先賢既自弁<sub>二</sub>懈慢<sub>一</sub>之得失。末学勿<sub>二</sub>更迷<sub>一</sub>往生之難易<sub>一</sub>也。<sup>7)</sup>

ここで問題となるのは、傍線①の「修因正念不得雜疑」の読解である。引用元の『觀經疏』では「四<sub>ニ</sub>ハ明<sub>ス</sub>修因正念<sub>ニ</sub>シテ不<sub>レ</sub>ト云フコトヲ得<sub>レ</sub>雜<sub>ル</sub>ユルコトヲ疑<sub>ラ</sub>。」とあり、「雜」の一字を動詞として読んでゐる。『決定往生集』の『大正』と『浄全』の返点もこれに倣つてゐる。ところが、続く傍線②で珍海は、雜修と疑心の二説を懈慢と胎宮の因として文字通り「双拳」し、加えて「今言雜・疑者并拳二説。雖<sub>二</sub>是二説<sub>一</sub>潛合為<sub>レ</sub>一。」とも述べ、雜修による懈慢界往生と疑心による胎生を会釈してゐる。この解釈を成り立たせるためには、「修因正念不得雜疑」中の「雜」の字は「雜修」の意であるとし、「修因正念不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>雜<sub>一</sub>・疑。」と訓読しなければならぬ。珍海は、この『觀經疏』の説示に雜修と疑心の二説が列挙されてゐると捉え、「先賢」である善導こそ懈慢界の得失を弁じてゐる人師と位置づけ、末学に対して往生の難易を迷ふことなきよう促してゐる。この珍海独自の解釈は、まさに雜修による懈慢界（すなわち辺地胎生）である安養化土への凡夫往生の立場にあることを示す根拠と言つてよいであろう（拙稿 一〇二二）。

## 五 決定業としての念仏

じつは、冒頭の「開宗の文」中に説かれる「正定之業」の語句は、『決定往生集』の『大正蔵』では「正定業」

となっている。『大正蔵』は寿永二年（一一八三）の写本が底本であり、「正定之業」とする『浄全』の底本と思われる江戸期の版本とは五百年近く隔たりがあり、開版の段階で『観経疏』に沿って「之」の一字が附記された可能性も否めなくはない。と言うのも、珍海が影響を受けた永観集『往生捨因』に見られる同箇所引用と、その古い写本も「正定業」と記されているからである。「之」の一字に着目する理由は、『決定往生集』に見られる珍海の解釈から判断すれば、決定業として称名念仏を捉えていることが窺知され、その場合「正しき定業」と読むことが可能となるからである。

決定業は定業とも略称され、『俱舍論』等に説かれる果を受ける時分が定まった行業のことであり、今生・次生・第三生以降の三時に分かれている。「第五修因決定」の第三「明往生正業」では、「開宗の文」引用の後に造仏や大乘経典を読誦・書写することも「定業」となり得ることが指摘され、その「定業」は『菩提心集』に見られる同趣旨の記述により決定業として捉えられたことが確認できる。また「第五修因決定」の第六「明念仏分齊」では、現生の十念と臨終の十念の優劣を論じるにあたり、珍海は両者の十念を明らかに決定業として解釈しているのである。

ところが、珍海の『三論名教抄』『四業義』等でも示されるように、三論教学では大乘の諸業において決定業を認めていない。その場合、念仏が決定業であることは矛盾となってしまう。その矛盾を解消するため「第六除障決定」では、自性としての決定業は無いが因縁による決定業は有るという理論が展開される。すなわち「仏大悲本願之力・護念摂取光明之力・内有仏性力・先有結縁力・現在善友力・得聞大乘力・信受教誨力」の七つの「衆縁和合力」に依拠した念仏は因縁による決定業であるため、それらの和合の中に定性は無く、自性としての決定業ではないので矛盾はしないという訳である。以上のことから、珍海は念仏を決定業として捉えていたことが知られるので

あり、文脈の流れから判断して、善導の『観経疏』『散善義』引用中の「正定業」も決定業として理解するのが妥当と思われる（拙稿 二〇二〇）。

## 六 おわりに

本稿では「開宗の文」に関する問題点を中心に、易行としての専修念仏を確立した法然に対し、凡夫の易往を追求した珍海の浄土思想の一端を概観してきた。『決定往生集』所説の「信心決定義」に見られる「暫信」は、珍海によって専修二修のうち雑修と会釈され、源信等により説かれてきた諸行往生を突き詰めたかたちとして、下輩人の雑修による安養化土往生が、凡夫往生のひとつの解答として導き出されたのである。珍海は吉蔵の本迹二門の仏土観を持つとされるため（伊東 二〇一一、四二五―四二五頁）、報土説自体を否定している訳ではないと思われるが、法然の標榜した専修念仏による凡夫の報土往生とは明らかに異なる立場である。その他にも、菩提心を正因であり業主として重んじている点、成仏の正因として中道仏性を説くことなど、法然との相違は多々認められる。加えて、珍海は称名念仏を決定業と捉えているのであり、「開宗の文」中に説かれる「正定業」の語句も、珍海は決定業として理解していたとするのが妥当と思われる。『決定往生集』の表題は、信心による往生決定を論証する要文集との意の他に、決定業としての念仏による往生を説き示すためとの、二重の意味で名づけられたと考えることも可能であろう。

註

- (1) 大正三七・二七二頁上中／浄全二・〇五八頁下。
- (2) 大正八三・一一二頁中下／浄全九・三二八頁下～三二九頁下。
- (3) 大正八三・〇一二頁上中／浄全九・三二八頁上下。
- (4) 大正八三・〇〇四頁中／浄全七・〇一五頁。
- (5) 大正八四・一〇三頁上／浄全一五・四七四頁下。
- (6) 大正八四・一一八頁上。
- (7) 大正八四・一〇六頁上中／浄全一五・四八一頁上下。

参考文献

- 伊東昌彦『吉蔵の浄土教思想の研究 無得正観と浄土教』(春秋社、二〇一一)
- 井上光貞『日本浄土教成立史の研究』(山川出版社、一九五六／新訂版、一九七五)
- 小野玄妙「珍海已講の芸術」(『密教研究』五〇、一九三三)
- 坂上雅翁「浄土仏教の思想」第七卷「珍海―画僧と学僧―」(講談社、一九九三)
- 永村眞「中世醍醐寺と三論宗」(大隈和雄編『仏法の文化史』吉川弘文館、二〇〇三)
- 平子鐸嶺「珍海已講」(『仏教芸術の研究』金港堂書籍、一九一四／初出は雑誌『國華』國華社、一九〇四)
- 普賢晃寿『日本浄土教思想史研究』(永田文昌堂、一九七二)
- 拙稿「決定業としての念仏―珍海撰『決定往生集』における解釈―」(『印佛研』六八(二)、二〇二〇)
- 拙稿「『日光大師行状画図翼賛』に見られる珍海伝の一考察」(『印佛研』七〇(二)、二〇二二)
- 拙稿「禅那院珍海已講の捉える専修」(『佛教學』六三、二〇二二)

易往を求めた珍海、易行を極めた法然

キーワード 専修、雑修、化土往生、決定業